

岩崎灌園『本草図譜』（復刻版）巻之五十三 菜部
 神奈川大学図書館所蔵

目次

■ 新図書館長からのメッセージ	
図書館長／松本 安生	・・・ 2頁
平塚図書館長／中山 堯	・・・ 3頁
■ 2014年度 図書館ガイダンス報告	・・・ 4頁
■ 〔連載〕	
書物の歴史 4. 『書物の敵』	・・・ 6頁
■ 《図書館の所蔵資料紹介》	
サリス『信仰懷疑論概要』 1488年	・・・ 7頁
■ 図書館からのお知らせ	
今号の表紙	
編集後記	・・・ 8頁

本の歴史を変えた人々⑥

長谷川 武次郎 (1853-1938)

明治期に作られたちりめん本の考案・出版者。ちりめん本とは和紙を圧縮して縮緬布のような風合いにし、日本画の絵師による挿絵などを入れた和綴りの美しい本である。古くから伝わる日本の昔話や風俗などが外国語で記され、当時の日本旅行の土産物として外国人に人気があった。長谷川武次郎は日本橋の輸入食料などを営む家に生まれ、ミッションスクールで英語を学んだ。当時来日していた外国人の知り合いも多く、ヘボン、チェンバレン、ハーンなども訳述に協力している。

新たな図書館への歩みを確かにするために

神奈川大学図書館長 松本 安生



神奈川大学 100 周年に向けた構想として、「知識を求める人」そして「学びを求める人」へ開かれた図書館となるべく、最大収容冊数 200 万冊、閲覧席 1500 席以上の図書館を造ることを基本方針に掲げた「横浜キャンパスマスタープランに基づく図書館改修についての提案」が、昨年度末に図書館運営委員会より学長に提出されました。このことについては、5 月の教授会において各学部の図書館運営委員より報告があったかと思いますが、この提案に示された未来の図書館像について、この場を借りてもう少し詳しくご紹介させていただきます。

2011 年 3 月に決定された「横浜キャンパスマスタープラン」において、神大橋周辺のエリアを、図書館等を中核とするメディアテーク・コア・ゾーンとすることが示されました。この構想を具体化するため、図書館前広場（現 12 号館の跡地）とこのメディアテーク・コア・ゾーンを一体として構想することが今回の提案の肝となっています。このために、図書館前広場に面した空間に新たな増築棟を建設し、ここにメイン・エントランスを設置するとともに、開かれた図書館を象徴するオープン（ないしはコミュニティ）・スペースを整備することを提案しています。また、図書館前広場の地下（現 12 号館 1 階レベル）には、コミュニティ・ラウンジとオープン・スタジオを設け、前者は学生、教職員のみならず市民、企業、行政などとの交流の場、後者はこれらの交流から生まれる集会等のイベントを開催する場として活用することを想定しています。こうした機能を果たすために、カフェ・ラウンジなども必要かもしれません。

一方、増築棟の 2 階及び 3 階はラーニング・コモンズとし、複数のグループが議論のできるオープンな学習の場や、少人数で綿密な協同学習を行うスペースなどを整備することを提案しています。これらが学生の新たな学びの場として、自律的な学習を支援する重要な機能を果たすものと期待されます。

さらに、学生の図書館利用のモチベーションを高めるために、他大学の図書館と比較しても狭隘な開架図書コーナーのスペースを拡充することが求められます。具体的には、現在の閉架図書の収納場所である地下 2 階を開架図書コーナーとして改修するほか、図書館前広場の地下にも新たな開架図書コーナーを設けることを提案しています。これらのスペースを学生に魅力的なものにするためには、学生の関心が高いハウツー本や上質な漫画のコーナーを設けることも考えられます。

このように今回の図書館改修の提案は、建物の全体的な形状と各目的に沿ったスペースの配置の概要が中心となっています。前図書館長と小委員会委員の先生方のご尽力によりまとめられたこの提案を受け、横浜キャンパスのみならず湘南ひらつかキャンパスも含めた神奈川大学図書館が地域における学習・研究活動を支える学術情報基盤の中核となるよう、教職員と学生さらには地域も巻き込んだ幅広い議論を進めていくことが、新図書館長である私に与えられた大きな使命の一つだと感じております。ぜひ、皆さまからのご意見やご要望をお待ちしております。

私の推薦する本

新しい図書館を考えていくために、以下のような書籍をこれから読んでみたいと思っています。ぜひ、皆さまにもご一読いただき、一緒に考えていければ幸いです。

- アントネッラ・アンニョリ『知の広場：図書館と自由』萱野有美訳 みすず書房 2011 年
- 加藤信哉・小山憲司編集『ラーニング・コモンズ：大学図書館の新しいかたち』勁草書房 2012 年
- 猪谷千香『つながる図書館：コミュニティの核をめざす試み』（ちくま新書）筑摩書房 2014 年

属人的時間

神奈川大学平塚図書館長 中山 堯



時間の感覚に捕われて60年以上になる。時間は個体の属性であると、このごろはつくづく思う。時間とともに自分のすべてがあるのだから。

大学の時間は緩い社会的時間である。学生にとっては主体性や自律性を獲得するためのモトリウムとしてそれが提供されている。時にその貴重な猶予期間の浪費を見るといたたまれない思いもするが、ゴールなき探索に効用関数は持ち込めない。彼らが身体に蓄えているたくさんの時間に委ねればすむことだ。放っておけないのは自分の時間である。しばらく前から見知らぬ人に会釈をされることに気づかされている。どうやら相手は個人を認識しているのではなく、相応の顔への一般的礼儀を示しているに過ぎないのだ。時間の関数としての顔が人を社会化していくわけだ。まあ、顔がその年齢らしくなっていくということだが、社会化というより生物学的類型化だろうか。もちろん、家族間関係の変化が自己認識という社会化の強力な矯正圧力にもなる。

年をとるほど時間経過が速くなる感覚は、誰でも経験するだろう。30年くらい前、それが記憶の問題ではないかと考えたことがあった。知覚が記憶に定着する量が増え加齢に伴って減り、経験の想起が少なくなって経過時間を短く感じてしまうのではないかという想像だった。同じころ同じようなことを二人の退官教授が話しているのをたまたま耳にして、おやと思ったことだった。また、比較的最近になって、そのような記事を Web で読んだ記憶がある。脳科学者からはいい加減な空想だと怒られそうだが、仮にそうだとすれば記憶はその持ち主の時間そのものだと言えるだろう。

昨年は40年ぶりくらいに大学時代の仲間4人で会う機会を持った。遺言を書いたのもいれば、ガンを患っているのもいる。40年間の航跡でそれぞれ姿が変わってしまったのだが、自分の時間をそれだけ使って、記憶の外形としてのモノを作り、価値を創り出してきたと言うべきなのだろう。

書物もその著者の個人的な時間を内在した記憶の表現型の一つに違いない。図書館には、その意味で膨大な時間の蓄積がある。記憶の巨大倉庫という役割は今や Internet/Web に取って代われ、図書館の存在意義が問われてもいるが、それが記憶の外部化方式の変化に過ぎないとすれば、図書館をそれに適応させればすむ話ではある。その発展形態の一つがラーニングコモンズであろう。日本語にすれば「適応型共有学習空間」とでもいうところだろうが、実質的なコモンズとしては建物としての図書館に束縛されない分散型コモンズの方が手取り早いと思われる。この先 MOOC などのオンライン講座の普及が進めば、図書館どころか大学自体のあり方が問われることになるだろうが、それは個々の学生に対しては社会的時間が拡張されることで、属性としての自分の時間が増えるという大きな恩恵をもたらすことになる。

ということで、いろいろな意味で時間というもの強く意識させる3冊を薦めたい。「短いと感じる人生こそよい人生」とは邱永漢の言葉である。ここの主人公たちにそのことが通じるかどうかは読み方次第だが。

私の推薦する本

- カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』土屋政雄訳 早川書房 2006年
- 中野 雄『丸山眞男 人生の対話』(文春新書)文藝春秋 2010年
- 野呂邦暢『諫早菖蒲日記』梓書院 2010年

2014年度 春の図書館ガイダンス報告

新入生にとって、高校と大学で大きく違うと感じるものの一つに図書館があります。それまでの高校の図書室と比べ、蔵書数も規模も大きな大学図書館では、利用の仕方や資料の探し方などで戸惑うことも多いでしょう。横浜図書館では、FYSの授業以外にも昼休みや夕方方の時間帯を利用した、自由参加のガイダンスを毎年行っています。平塚図書館では経営学部、理学部の全新生を対象に、授業時間内の図書館ツアーとOPACガイダンスを行いました。

■ 横浜図書館

図書館ツアー 参加状況

日 時：4月4日(金)～4月12日(土)

12：25～12：45 (第1回)

16：20～16：40 (第2回)

参加人数：85人

アンケート回答者数：33人

アンケートでは「地下書庫を見学できて良かった」といった感想が多く寄せられていました。大学図書館の規模の大きさを実感してもらえたのではないかと思います。

OPACガイダンス 参加状況

日 時：4月21日(月)～4月26日(土)

12：25～12：45 (第1回)

16：20～16：40 (第2回)

参加人数：73人

アンケート回答者数：48人

アンケートでは「OPACで本を探す以外にも便利な機能があることが分かった」といった感想や「視聴覚資料も探せるとは知らなかった」といった感想が寄せられていました。使いこなせていると思っている人も、一度ガイダンスを受けてみると思わぬ発見があるのかもしれません。

学部	回答数	内 訳		
法学部	6人	法	1年	3人
		自	1年	3人
経済学部	7人	経済	1年	6人
		現ビ	4年	1人
外国語学部	1人	スペイン	1年	1人
人間科学部	7人	人科	1年	7人
工学部	10人	機械	1年	2人
		電気	3年	1人
		物質生命	1年	2人
		建築	1年	4人
		総工	1年	1人
大学院	1人	経済学研究科		1人
その他		社会人		1人

学部	回答数	内 訳			
法学部	18人	法	1年	6人	
			2年	3人	
			3年	1人	
			4年	1人	
				1人	
		自	1年	1人	
			2年	1人	
			3年	1人	
4年	3人				
経済学部	11人	経済	1年	7人	
		現ビ	1年	4人	
外国語学部	5人	英文	1年	1人	
		スペイン	1年	1人	
			3年	1人	
		中国語	1年	2人	
人間科学部	1人	人科	1年	1人	
工学部	10人	機械	1年	1人	
		電気	1年	2人	
		物質生命	1年	3人	
		情報シス	1年	2人	
		建築	1年	2人	
大学院	2人	歴民	M2	1人	
		建築		1人	
その他		社会人		1人	

*学年欄の空欄は、記入なし

■ 平塚図書館

平塚図書館ではFYSの一環として、経営学部・理学部対象に4月15日(火)～5月28日(水)の間「図書館利用ガイダンス」及び「図書館見学」を実施しました。また、経営学部1年生(受講希望FYSクラス)を対象とした「情報検索(データベース)セミナー」を5月20日(火)～6月4日(水)に実施しました。

図書館ガイダンス(見学含)は、従来の図書館イメージを一新し、また、外部講師等による実践的情報検索セミナーは、具体的学修支援策としても有効かと思われます。

図書館利用ガイダンス・図書館見学 実施状況

日時：4月15日(火)～5月28日(水)

FYS授業時間帯

参加人数：経営学部 536人

理学部 442人

図書館では本以外にも、新聞や雑誌、電子書籍やデータベースなども利用できることを説明しました。情報収集の手段が多様化し、図書館は本を探す所という古くからのイメージから変化していることを実感してもらえたのではないのでしょうか。

学部		実施日	受講数
経営学部	国際経営	4月15日	67人
		4月16日	205人
		4月18日	134人
		4月22日	67人
		4月23日	63人
理学部	数物	4月30日	66人
	情報	5月7日	100人
	化学	5月14日	104人
	生物	5月21日	96人
	総理	5月28日	76人

情報検索(データベース)セミナー

日時：5月20日(火)～6月4日(水)

FYS授業時間帯

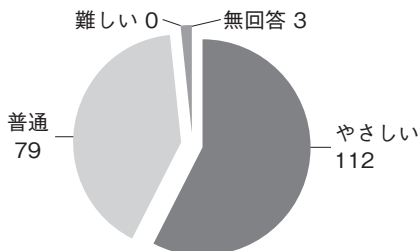
参加人数：437人

情報検索セミナーでは、実際にデータベースにアクセスして実習を行いました。効率的な情報収集の方法を身に付けて、これからの4年間に役立てて欲しいと思います。

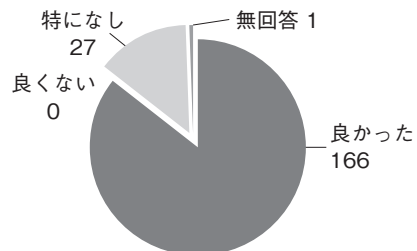
学部	対象人数計	実施日	受講数
経営学部	437人	5月20日	68人
		5月21日	80人
		5月23日	96人
		5月27日	34人
		5月28日	48人
		6月4日	111人

アンケート結果 一部抜粋(平塚 図書館利用ガイダンス・図書館見学)

1. ガイダンス内容について



2. 図書館見学について



ヴィクトリア時代のベストセラーで現在も愛書家に知られる『書物の敵』という本があります。著者はウィリアム・ブレイズ (William Blades, 1824-1890)、書誌学者、インキュナブラ研究家であり、印刷工でもありました。1880年に初版が刊行されたこの本は、そのタイトル通り書物を破壊し痛めつける十の「敵」について書かれています。神奈川大学図書館でも資料の保管は大きな問題です。空調や温度・湿度の調節、書架の定期清掃や貴重資料庫の燻蒸など、様々な悪影響から本を守ろうと努力しています。

ウィリアム・ブレイズによる書物の十の『敵』

1. 火の暴威 (火災や焚書はもちろんのこと、料理の煮炊きに本を燃やす不屈き者がいた！)
2. 水の脅威 (雨、水蒸気、湿気は本の敵)
3. ガスと熱気の悪行 (電気の普及する前の19世紀はガスランプを使用していた)
4. 埃と粗略の結果 (不潔で埃の積もった環境は本の敵)
5. 無知と偏狭の罪 (価値が分からなければ本はただの古紙)
6. 紙魚の襲撃 (本のページを食い荒らす虫)
7. 害獣と害虫の饗宴 (ゴキブリ、ネズミも本が好物)
8. 製本屋の暴虐 (かつて本は繰り返し製本されたため、かえって破壊されたことも)
9. 蒐集家の身勝手 (本を愛するあまりページを破り取って集める破壊者がいた！)
10. 召使と子供の狼藉 (使用人の無神経な本の取扱い、書齋で暴れて本を壊す子供)

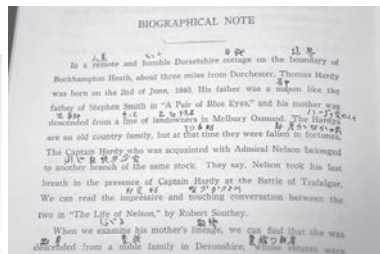
ブレイズのような書物愛好家の存在は、今では単なるマニアとしか思われぬのかもしれませんが。しかしこの本では、内容さえ読めればいいと本のサイズを切り詰める輩を「敵」としているように、モノとしての書物は、装幀や印刷、活字、装飾などそれぞれに発展をしてきた文化が一つの形になったものであり、それゆえ豊かな文化や知識の継承が可能になるのだという主張が伝わってきます。

『書物の敵』には、ウィリアム・ブレイズがこの本を書いた19世紀特有の事情によるものもありますが、多くの「敵」は現在でも相変わらず生き残っているようです。高宮利行氏によるあとがきには、ここに書かれている以外の「敵」として、間違った仕事をする〈図書館員〉と文字は読めても書物は読まない〈第二の文盲〉なども挙げられています。我々も気持ちを引き締めて書物に向き合いたいと思います。

天(上小口)に指をかけて引っ張ると・・・



書き込み



書き込み

飲み物のシミ



ウィリアム・ブレイズ『書物の敵』高橋勇訳、高宮利行監修 八坂書房 2004年

(資料サービス課 荏原直子)

サリス『信仰懷疑論概要』1488年
コーベルガー印行（インキュナブラ）

請求記号：A196-25 横浜貴重書庫



創造的な考案が一つの有用な発明として世に現れるには二つの条件が先行するようだ。一つはその考えを具象化する設備と資材、もう一つはその発明に対する社会的要望である。1450年頃の活版印刷術の発明においてもこの二つの条件が満たされていた。大学の創立や世俗の人々による蔵書数の増大など、読書階層が拡大し書籍の需要が大きくなっていった当時、金細工師として金属加工の技術を持ったヨハネス・グーテンベルクがヨハン・フストから融資を受け活版印刷技術を発明する。最初に印刷された書物は『四十二行聖書』と呼ばれる美しい書物である。だが印刷事業を早く開始したいフストは仕事がなかなか進まないグーテンベルクに業をにやし、訴訟を起こして印刷設備等を没収した。フストは自分の娘婿でグーテンベルクの弟子ペーター・シェッファーに事業を託し、活版印刷術はフスト＝シェッファーによって継承され、ヨーロッパ各地に伝播していった。印刷術の発明はその後の世界を変え、破産したとはいえグーテンベルクの名声は今でも輝き続ける。

グーテンベルクの名声に比べればあまり知られてはいないが、もう一人、同時代のドイツに出版文化にとって重要な人物がいた。当時のヨーロッパにおける最大手の印刷業者、出版業を営み書籍販売業を社会的な産業として成長させたニュルンベルクのアントン・コーベルガー（Anton Koberger, 1445-1513）である。コーベルガーは書籍が作られた後に直面する問題、販売という分野に新たな道を開いた貢献者である。活版印刷術の発明によって大量生産が可能になった本の取引は、それ以前の写本の時代とは事情が異なってくる。写本の時代には注文があって初めて制作が開始されるが、印刷技術の発明以降はあらかじめ印刷部数を決めて生産するという事になる。そのため受注生産が前提の写本とは異なり、作った本をどう売るかという事が問題になってきたのである。初期の印刷業者には、印刷した本の資金回収ができずに倒産したところもあったという。マーケティングという分野が存在していないに等しい当時、コーベルガーは顧客が書籍を手にとって見ることができるよう国内外に支店や出張所を置いて販売したり、出版書のパンフレットを作って書籍市などでヨーロッパ中の書店に宣伝したりもした。また、そのほとんどを当時のヨーロッパにおける知的共通言語であったラテン語で印刷し、広範囲で大量の販売を行った。

本書『信仰懷疑論概要』は、コーベルガー印刷によるインキュナブラ（1500年までに出版された揺籃期印刷術の書物）である。フランシスコ会修道士サリスの記した告解のための手引書で、版を重ね何度も出版された。インキュナブラによく見られるように、活字印刷された紙面に美しい手書きの装飾が書き加えられている。この美しい紙面を見ると、コーベルガーの功績はその事業の大きさだけでなくことが分かる。実際に15世紀印刷技術が生んだ偉大な作品と言われる『ニュルンベルク年代記』を印刷したのも、コーベルガー印刷所である。大事業家として、偉大な印刷家として、これからもコーベルガーの名は永く記憶されていくことだろう。

（資料サービス課 荏原直子）

参考文献：戸叶勝也『ドイツ出版の社会史：グーテンベルクから現代まで』三修社 1992年
箕輪成男『近代「出版者」の誕生：西欧文明の知的装置』出版ニュース社 2011年

図書館からのお知らせ

横浜・平塚共通

◎夏季長期貸出について

貸出期間：7月14日(月)～9月16日(火)

返却期限：9月30日(火)

対 象：学部生・科目等履修生

冊 数：10冊

◎一般公開休止について

前期試験実施に伴い、下記期間中の一般公開を休止いたします。

期 間：7月1日(火)～7月31日(木)

◎一斉休暇に伴う休館について

期 間：8月12日(火)～8月16日(土)

横 浜

◎夏季休業期間中〔8月1日(金)～9月18日(木)〕

の開館スケジュールについて

開館時間：9:30～18:00

○ 3Fは閉室します。

※日・祝日および一斉休暇期間は休館です。

平 塚

◎休日開館について

前期試験実施に伴い、下記日程を開館といたします。

日 程：7月6、13、20、27の各日曜日

開館時間：9:10～16:50

◎夏季休業期間中〔8月1日(金)～9月18日(木)〕

の開館スケジュールについて

開館時間：9:10～16:50

○ 第2閲覧室は閉室します。

※土・日・祝日および一斉休暇期間は休館です。

編集後記

1963年の小説『寒い国から帰ってきたスパイ』は、スパイ小説の金字塔である。作者はジョン・ル・カレ (John le Carré, 1931-)、実際にイギリスの諜報部員だった経験を持つ小説家である。スパイ小説と言えはまず思い浮かぶのはジェームス・ボンドだが、この作品には007シリーズのような華やかさはない。物語の舞台はまだベルリンの壁が存在した東西冷戦の時代、一人の諜報員が徹底して自らの人生や人間性を犠牲にして任務を遂行していく過酷な世界が描かれる。主人公アレックは作戦のため実際にその人生を転落してみせる。友人知人に見放され、職を転々として困窮し刑務所にまで入る。彼が人間的な感情を取り戻す唯一の拠り所となった女性も巧妙に仕組まれた作戦に巻き込まれていく。あらゆるものを犠牲にして任務を果たした主人公は、最後になってこの作戦の真の狙いを知らされる、といったストーリーだ。

作者はこの作品で「個人はいかなる思想よりも価値の高い存在である」という西欧デモクラシーを貫く観念を、体制防衛のために意識的に放棄した人々の群像を描いたと語っている。この作品の結末のように、大衆の利益のために個人を犠牲にして顧みない思想ほど危険なものはないのだ、と。

小説を読むことの楽しみの一つは、物語に夢中になることで自分の生きる世界とは異なる時代や出来事を“体験”できることだ。我々が今生きている世界の行く末を考える時、大きなもののために個人が犠牲にされる世界を体験してみることは必要なかもしれない。

(N.E.)

今号の表紙

『本草図譜』は、江戸時代の末に作られた本邦最初の本格的彩色植物図鑑である。著者は岩崎^{かんえん}灌園。武士であり本草学者であった灌園が戦のない平和な時代に記した本書全九十六巻は、後の植物学、生薬学に大きく貢献した。